彙　報

二〇〇九年度秋期東洋学講座講演要旨

（東洋文庫とアジア2―東洋文庫は日本のアジア研究をいかにリードしてきたのか）

第五一四回　一〇月二七日（火）

私の東南アジア研究と東洋文庫

東洋文庫研究顧問
国立公文書館
アジア歴史資料センター長
石井米雄

二〇一〇年二月一二日ご逝去。

第五一五回　一一月二日（月）

東洋文庫の朝鮮史料と朝鮮近世財政史研究

東洋文庫研究員
東京大学准教授
六反田豊

東洋文庫には約一五〇〇部の朝鮮本が所蔵されている。日本の朝鮮本所蔵機関はほかにもいくつかあるが、東洋文庫の朝鮮本は数のうえで他の機関を圧倒し、しかもそのなかには高麗版や養安院本などの貴重本も多く含まれる。東洋文庫は、文字どおり日本有数の朝鮮本所蔵機関といってよい。しかし、東洋文庫所蔵の朝鮮本コレクションの特徴はそれだけにとどまらない。原本のみならず国内外他機関所蔵の朝鮮本の写真版・電子複写版・マイクロフィルムなどが多数所蔵されているという点も、大きな特徴の一つである。試みに『増補東洋文庫朝鮮本分類目録』（一九七九）から該当するものを摘記すると約六〇〇部に達する。とりわけ史部では四六八部と群を抜いており、これは史部全体の約三割を占める。同目録以後に収集されたものも含めると、その数はさらに増えるであろう。

このような複製本の大半は、第二次大戦後、おもに田川孝三によって収集された。その範囲は、国内では天理大附属天理図書館や東大総合図書館、京大附属図書館、学習院大附属図書館、大阪府立中之島図書館、など主要な朝鮮本所蔵先をほぼ網羅し、また海外では韓国のソウル大奎章閣、国立中央図書館、国立国会図書館などのほか、アメリカのカリフォルニア大バークレー校（浅見文庫）も対象とされている。いわば、朝鮮研究、なかんずく朝鮮史研究の一大史料センターが東洋文庫に形成されているわけで、このこ

とは、東洋文庫がたんなる図書館ではなく、まさに研究機関であることを如実に示すものといえよう。その意味で、朝鮮本の収集事業に尽力した田川の功績はより評価されてしかるべきである。

田川孝三は、日本における朝鮮時代史研究の泰斗というべき人物である。一九〇九年に当時の京城で生まれ、京城帝大で朝鮮史を専攻し、卒業後は朝鮮総督府朝鮮史編修会に勤務して『朝鮮史』の編纂に従事した。戦後は一九四八年から国立国会図書館支部東洋文庫に奉職したが、そのかたわら朝鮮時代史の研究も続け、一九六二年に東大から文学博士の学位を授与された。そして一九六六年から三年ほど東大文学部で専任講師を務めたのち、再び東洋文庫研究員として活動し、一九八八年に亡くなっている。こうした経歴からも明らかなように、田川と東洋文庫との関係は四〇年ほどの長きにおよぶ。田川はその間に、東洋文庫の朝鮮本コレクション充実に心血を注ぎ、前述のような多量の複製本収集をおこなったのである。

ところで、朝鮮時代史研究者としての田川は、貢納制研究や郷村社会史研究などで緻密な実証にもとづく重厚な研究を発表し、戦後の朝鮮時代史研究を質・量ともにリードしてきた。田川の研究には、彼が東洋文庫で収集した朝鮮史料を活用したものも少なくないが、ここでは学位論文を公表した『李朝貢納制の研究』（一九六四）に注目したい。朝鮮時代前期の収取体制で中核的な存在であった貢納制の制度と変容を詳細に明らかにしたものであり、その成果は現在もなお高く評価されている。この研究では、現物上納制度である貢納制が崩壊し、一七世紀にそれを地税化した大同法が実施されるところまでが展望されている。おそらく田川は、大同法についても研究を意図していたものと思われ、それらに関する史料の複製本も収集され、東洋文庫に所蔵されている。しかし、その後の田川の研究はもっぱら郷村社会史へと向かったため、大同法についての専論が書かれることはなかった。

奇しくも私は、縁あって大同法について研究する機会をえて、これまで三篇の論文を発表することができた。いずれも断片的な成果に過ぎないが、田川も関心を抱いていたと思われる地方財政次元での大同法の運用実態と、その変容という点で新知見を提示することができたと考えている。田川の研究を受け継ぎ、批判的に発展させるとともに、東洋文庫の朝鮮史料を活用した研究を進め、また東洋文庫の朝鮮史料センターとしての機能をさらに充実できるよう、これからも微力を尽くしていきたい。

第五一六回　一一月一六日（月）

日本における山海経図
―山海経絵と山海異物

東洋文庫研究員
成城大学名誉教授　朽尾　武

一　絵図山海経と山海異物

『山海経』は絵を見てこれに文をつけたという説がある。禹の頃に書かれ、秦漢の頃に今のような形になったともされる。司馬遷が『史記』大宛伝に初めて『山海経』に言及してより、現在に至るまで議論は尽きない。現在流布している「絵図山海経」は明以後のもので覆宋版と思える。次に絵入本『山海経』のみを列挙する。

（1）明・蔣応鎬図絵・李文孝鐫（刻）『山海経』十八巻、万暦二十五年〈一五九七〉始刻、同四十七年〈一六一九〉序刊聚錦堂刊。同和刻本　寛文〈一六六一―一六七三〉頃刊。今回中日比較対照に使う。原本の絵は同じだが、本文は字体を異にする。全七十四図。

（2）明・胡文煥『山海経図』「格知叢書」所収。

万暦二十一年〈一五九三、日本文禄二年〉序刊。『三才図絵』の母図と考えられる。『中国古代版画叢刊二編、第一輯』（上海古籍出版社一九九四年影印本）。『山海経』に無い図も収める。一三三図、「山海異物」に近い。

（3）明・王崇慶釈義・董漢儒校訂・蔣一葵図『重校山海経釈義』図三冊七十五図、本文七冊十八巻、万暦二十五年〈一五九七〉序刊、蔣応鎬本より一図多いのは第一図に新しく「愈児」図を加えたため、応鎬本と図柄は極めて類似。

（4）『五車抜錦』巻四「山海異物」一二四図、「諸夷雑誌」「中国日用類書集成」1汲古書院平成十一年六月刊。

（5）『妙錦万宝全書』巻四「山海異物」一四六図「外夷雑誌」万暦四十年〈一六一二〉序刊。同集成12所収。平成十五年九月刊。（3）と同じく影印本、（3）（4）の図柄はほぼ同じ。

（6）私蔵本「山海異物」（題簽を欠く、仮称）『万用正宗不求人』（汲古書院影印刊）の漢文の説明文を簡略に和訳し、彩色した絵を配す。五十七枚一〇一図。写本。

（7）スペンサーコレクション本「山海異物」書き題簽四十八図袋綴、見開き右側に和訳説明文、左の円の中に彩色画を配す。（4）の図が種本と考えられる。

（8）『怪奇鳥獣図巻』巻子本、一巻七十六図、伊藤清司解説、磯部祥子翻刻原色影印本、二〇〇一年一月成城大学図書館蔵。「山海異物」による作図、『山海経存』の図を影

印附す。

（9）清・呉任臣『山海経広注』十八巻、図五巻、康熙六年〈一六六七〉九月序刊。中国古典文学大系8『抱朴子列仙伝・神仙伝　山海経』平凡社一九六九年九月刊所収影印図。

（10）清・畢沅『山海経』十八巻四冊図一冊一四四図、光緒三年〈一八七七〉刊。

（11）清・汪紱『山海経存』有図、光緒二十一年〈一八九五〉立雪斎原本による石印本。

光緒期の絵入本は有るが省略する。これら絵入本の研究は次に示す馬昌儀著になる二本が最も秀れている。

（12）馬昌儀『全像山海経図比較』線装七冊、学苑出版社二〇〇三年八月刊。

（13）馬昌儀『増訂珍蔵本古本山海経図説』上下、広西師範大学出版社二〇〇七年一月刊。この書に先立ち『古本山海経図説』一冊　山東画報出版社二〇〇一年七月刊がある。

（14）文清閣編『歴代山海経集成』十一巻、西安地図出版社二〇〇六年四月刊、宋淳熙七年〈一一〇八〉池陽郡斎刻本以下『山海経地理今釈』まで十九種の版本を収める。

『山海経』の神話伝説を絵入りで解説した袁珂の『中国神話伝説詞典』上海辞書出版社一九八五年刊とこれをより充実させた鈴木博訳『中国神話・伝説大事典』大修館書店一九九九年四月が出色。

二　画像資料に採用した鳥獣人物について

画像資料（CDデジタル）には次の十件を収めた。①狌狌（猩猩）。②九尾狐。③人魚。④鳳凰・鸞。⑤西王母。⑥〜⑦長臂国（手長）、長股国・長脛国（足長）。⑧聶耳国。⑨〜⑩大人国・小人国。この十件について見解を述べたい。

①狌狌（猩猩）　南山経1（狌狌）、海内南経559梟陽国（髣髴）、今は中国では絶滅したオランウータンである。今はマレーウータンとボルネオオランウータンが生息する。日本では『倭名鈔』、『爾雅図』（『見在書目録』）に著録。「山海異物」90・91（『万宝全書』の通し番号）には猩猩と狒狒が別種として存在する。強いて言えばボルネオ種を猩猩（天敵の虎が居ないので太り気味）、マレー種が狒狒か。私本89、スペンサー本38は猩猩、成城本74に狒狒が画かれている。謡曲には「猩猩」「大瓶猩猩」「龍宮猩猩」「灘波猩猩」等がある。酒を飲む（毛色が朱色）、海中に住む、潯陽江、舞をまう、竹葉酒等のキーワードがある。また龍宮城の酒作り役人との設定もある。中国では猩猩を食する習慣もあった。謡曲の典拠は唐の李肇の『唐国史補』下猩猩酒屐による（和刻本がある）。謡曲では祝言物に属す。

②九尾狐　南山経8、海外東経546、尾が九またに分かれた狐。その形も画像石等少異あり。九尾は長寿を意味し、瑞祥とされる。梁の孫柔之の『瑞応図』に「九尾の狐は六合一同（世界が一つに和合）すれば則ち見はる、（周）文王の時、東夷之に帰す。一本に曰く、王者、色に傾かざれば則ち至る」と。（初唐『芸文類聚』巻九十九瑞祥部下狐）『延喜式』（延喜五年〈九〇五〉勅撰）巻二十一治部省祥瑞に「九尾狐　神獣也、其形赤色、或曰白色、音如嬰児」とある。一方妖狐の例もある。『郭氏玄中記』に「千歳の狐、淫婦と為る。百歳の狐、美女と為る」（玄宗の頃徐堅奉勅撰『初学記』巻二十九狐）とある。殷の紂の后妲己（九尾狐の化身）の話は有名、五代の李暹の『千字文注』にも見える。『倭名鈔』十八狐「孫愐切韻に云ふ、狐能く妖怪と為る、百歳に至り化して女と為る」と。謡曲では「殺生石」に玉藻の前が九尾の妖狐となり、殺されて殺生石となった。芭蕉の『奥の細道』に那須の篠原の玉藻の前の古墳を訪うた記事が見える。「山海異物」96所収、私本83、成城本58。

③人魚　南山経8赤鱬、北山経168人魚、海内南経567氐人国、海内北経618陵魚、いずれも海牛ジュゴン、絵の人魚は手足があるが、ジュゴンには手らしい前鰭はあっても後足は普通の鰭である。あるいは漁師が人魚のような衣類を身にまとい漁をしたのかも知れぬ。中国の人魚は男性名詞であり、西洋の女性名詞の人魚ではない。『倭名鈔』十九に「兼名苑に云ふ、人魚一名鯪魚上音陵魚身人面なる者なり。山海経注に云ふ、声小児の啼くが如し、故に之に名づく」と。郭璞が伝聞して鯢（山椒魚）という一説も伝える。これだと前後に一対ずつ足があるので合理的である。「山海異物」140の絵はスッポン状である。「外夷雑誌」に氐人国の絵があるがやはりスッポン状である。私本91、スペンサー本45所収。

④鳳凰　南山経31（汪紱本）、海内西経587588、大荒西経723狂鳥、大荒北経766九鳳等、31によると鳳凰は「丹穴の山に棲み、その形状は鶏のようで羽は五采文、名は鳳皇、首の文様は徳を曰ひ、翼文は義を曰ひ、背文は礼を曰ひ、膺（胸）文は仁を曰ひ、腹文は信を曰ふ。飲食は自然（のまま）、自ら歌ひ自ら舞ふ。見れば天下安寧なり」と。郭璞の注によると、漢の頃には数々現われたという。この経に言う鳳凰の形状は人為的で儒教の思想を反映した無機質なものである。時代は周の時代に付合する。袁珂は『楚辞』「天問」の簡狄と「離騒」の有娀の佚女の逸話を比較して鳳凰は玄鳥（燕）を祖とすると考えた。今、鳳頭雨燕（Hemiprocnidae）という雨燕がいて、燕のようにある時期、鳳凰が群集して現れる記録からして、習性が似ている。鳳凰の原型は輸入されたフウチョウ（極楽鳥）、今は中国に

居ない、インドシナ半島とマレー半島に分布するカンムリセイラン（キジ科）、雲南省に居る孔雀（マクジャク）、インド孔雀（動物園に居るもの、シロクジャクはその変異種）、雉、錦雞、孔雀雉（雲南省）等多数に上る。物の本によると、カンムリセイランは「ホーオー」と鳴くという。古代中国の民は鳳凰が現われると祥瑞というので、鳳凰に類する鳥が群飛し現れるとお上に報告し、恩賞を受けたのであろう。漢代の画像石を見るに明確に孔雀であり、朱雀も孔雀の一種である。キジ科の鳥一般が対象になる。鳳凰と鸞の違いは雌雄の違いであろう。『日本書紀』巻二十五孝徳紀の白雉元年（六五〇）にも祥瑞の例として鳳凰、騏驎、白雉、白鳥を言っている。『倭名鈔』巻十八にも「鳳凰　爾雅に云ふ、雄を鳳と曰ひ、雌を凰と曰ふ、羽虫の長なり」という。古墳時代（三世紀末～七世紀）、白鳳・奈良時代（六四五―七九四）の図像でも孔雀型に固定している。ただ、『芸文類聚』のような類書でも鳳凰・鸞と孔雀を区別しているのは一方が神格化しているための差異であろう。『延喜式』では九尾狐と共に祥瑞としている。「山海異物」では「楽鳥」20、私本18。「鸞」33、私本22、スペンサー本18、成城本20。「鸞鵠」34、私本27、スペンサー本20、成城本2に配す。

⑤西王母　西山経91、海内北経593 91によると、玉山が西王母の居所という。「其の状人の如く豹尾虎歯にして善く嘯く、蓬髪に勝（かんざし）を戴く。（西王母は）天の厲（わざわい）及び五残（五刑と残殺）を司る」という。593では「西王母几に梯る」とある。

漢代の画像石によると※に近いものもあるが、豹の様な姿ではない。恐らく、豹をトーテムとする民族の祭祀の扮装であろう。中国には西王母国から呪術師の集団として渡って来たのであろう。この長が死ねば交代したのであろう。

謡曲には「西王母」「政徳西王母」「東方朔」等がある。「三千年に一度花咲き実なる桃」が主題である。東方朔は漢の武帝の臣、かつて西王母の桃を盗んで仙界を追放されたという。かの『西遊記』の孫悟空も王母の桃を盗んだ。

⑥～⑦長臂国（手長）、長股国、長脛国（足長）　海外南経517長股国、同725長脛国。495に「長臂国は周饒国の東に在り、魚を水中に捕へ、両手に一魚を操る。（郭璞注）旧説に云ふ、其の人、手は下垂して地に至ると。云々」、517の長股国の璞注に「長脚の人は常に長臂の人を負ひ、海中に入りて魚を捕ふるなり」と。この注こそ清少納言の『枕草子』の手長足長の話の原拠になる荒海の絵である。巨勢金岡の作というが、今に伝わらず、寛政期の土佐光貞の筆である。『壒嚢抄』（天文元年〈一五三二〉成書）二、手長足長事にも詳しく長臂国・長脚国等が書かれている。「外

夷雑誌」に長臂国130、長脚国131の記事あり。

⑧聶耳国（でふしこく）　海外北経526聶耳国、大荒北経764儋耳国（たんしこく）　民話のこぶとり爺さんを思い出す。526聶耳国は「無腸国の東に在り。両文虎を使ふ。人為（た）る両手もて其の耳を聶（ささえる）す。（璞注）耳長く、行けば則ち手を以て之を攝持するを言ふなり。（中略）海水中に県居（居住）す。水の所に及んで奇物（珍しいもの）を出入す」と。水上民であろう。「外夷雑誌」126所収。

⑨～⑩（大人国）　海外東経541大人国、図欠、大荒東経660、大人之国、海外北経528博父国、同532跂踵国、大荒北経756大人之国、図欠。（小人国）大荒東経662663靖人、大荒南経708、焦僥国（せうげうこく）、同718719菌人。541大人国は「人為るや大にして、坐して船を削（けづ）る」と。660の大人国の郭璞注では身長一丈五六尺（約三七三・八六㎝）から三十丈（漢尺六九・一二m）に至る大人国や、小人国では焦僥国人は長三尺（漢尺六七・五㎝）等大小さまざまの人達を記す。郭璞は大人、小人の長短の限界を示すことが出来ないと結論づけている。「外夷雑誌」には長人国118と小人国132が見える。

スウィフトは一七二六年に『ガリバー旅行記』を出版したが、この英国の諷刺文学はその影響を受けていると考えられる。一七二六年は中国では世宗雍正四年に当る。「山海経図」をスウィフトが見ておれば面白い。教示を頂きたい。英国における『山海経』を図書目録で調査するのが、その出発点か。